

# 明治・大正期の高等教育における工芸

藤田治彦

手づくりの一品制作のイメージの強い「工芸」と、同一製品の大  
量生産の基本ともなる設計行為である「意匠、図案」との関係は、  
明治の初めから密接であり、しかも、芸術(美術)博物館創設など、  
近代日本の美術制度全体にもかかわる性格のものであった。

一八七〇(明治三年)に来日し、日本政府の鉄道建設技師長となっ  
たイギリス人技師、モレルが提出した建築局(工部省)設置の建議  
に含まれている「工芸館」は、サウス・ケンジントン博物館を念頭  
においての提案であった可能性が高い。同時期の文書と推定される  
「高橋由一油画史料」中にある「工芸館」も、同館およびそれを参  
考に西欧の主要都市に次々と設置された「工芸博物館」の類をさし  
ている可能性がある。デザイン史研究の先駆者ペヴスナーが、第二  
次世界大戦前後に『美術のアカデミー』その他で紹介することにな  
る、近代デザイン教育に先駆けたイギリスの官立デザイン学校や  
オーストリア芸術産業博物館などの組織と活動は、明治初年の日本  
にすでに伝わっていたのである。

ただし、当時「工芸」という用語が一般化していたとはいえない。  
殖産興業政策に影響を与えたドイツ人ヴァグナー(ワグネル)は、

一八七三(明治六)年のウィーン博を機に欧州各地の博物館を調査、  
一八七五(明治八)年に「百工及百工上芸術博物館ニ付テノ報告」  
「東京博物館創立に付ての報告」をまとめるなど、日本の博物館創設  
史上でも重要な役割をはたした。佐野常民の養子、浅見忠雅の訳に  
なるこの「百工芸術」は現在の「工芸」に近い言葉で、両報告にお  
ける「工芸」はむしろ“Technology”に近い。フランスの組織に関  
する箇所での「百工芸術」は“Beaux-arts appliqués à  
l'industrie”に対応し、オーストリアの博物館についての箇所での  
「芸術及び百工博物館」は“Museum für Kunst und Industrie”  
に対応している。黒川真頼が『工芸志料』を刊行するのは一八七八  
(明治十一年)、佐野を会頭とする竜池会が『工芸叢談』を創刊す  
るのは一八八〇(明治十三年)年のことである。

「工芸」の語は工業教育で用いられるようになる。一八八五(明  
治十八)年、東京大学に一時、工芸学部が、一八八七(明治二十)  
年開校の金沢区工業学校には美術工芸部が設けられ、東京職工学校  
は「工芸教員」養成を目的のひとつとした。「工芸」は“Technology”  
だったのであり、より美術的な工芸は「美術工芸」とされたのであ  
る。一八九〇(明治二十三)年に次の変化が明らかになった。職工  
学校が東京工業学校と改称され、養成目的の一部である「工芸教員」  
が「工業教員」に変えられたのである。東京美術学校に当初計画の  
図案科を改称して美術工芸科が設置された年でもあった。「美術工  
芸」が確立し「工業」が一元的な高等教育へと向かうはさまに「工  
芸」は消えた。その後、さらに工業大学への道を邁進する東京高等  
工業学校で陶芸や図案を学んだ最後の人々のなかから、もつとも重  
要な工芸運動のひとつ、民芸運動の主導的実践者たちが輩出したの  
は偶然ではない。